

西南学院百年史編纂に関する検討

—『西南学院七十年史』をもとにして—

伊原 幹治 委員

はじめに

「西南学院百年史」（以下「百年史」と略）編纂に関して、私に与えられた役割は1986年に刊行された『西南学院七十年史 上巻・下巻』（以下『70年史』と略）の検討である。そこで、作業としては『70年史』を概観し、そこから気がついたことを述べ、手元にある他校の記念史をなども参考にすることで、「百年史」編纂に向けた展望を得たいと考えている。

1. 『70年史』の特徴

1. 目次と構成

『70年史』は、A5版、上巻・下巻（索引・編集後記）の2巻で構成されている。次に、目次を見ていく。

【上巻】

発刊の辞 理事長 坂本重武、院長 C. L. ホエリー

序 論

第1章 「陸のシルクロード」による東洋伝道

第2章 「海のシルクロード」による東洋伝道

第一部 前史篇

第1章 バプテスト教会とは

第2章 バプテストによる東洋伝道—第四段階の伝道開始

第3章 プロテスタント諸教派による中国伝道

第4章 プロテスタント諸教派による日本伝道

第5章 バプテストによる日本伝道

第6章 日本における南部バプテストの組織強化と神学校

第7章 連合基督教大学と日本バプテスト神学校

第二部 戦前篇 総論

- 第1章 西南学院の創設
- 第2章 苦闘と前進
- 第3章 戦時体制下の学院

第二部 戦前篇 各論

- 第1章 西南学院中学部及び商業学校
- 第2章 西南学院高等学部

【下巻】

第三部 戦後篇 総論

- 第1章 変革と再出発
- 第2章 発展期を迎えた西南学院
- 第3章 変革期の西南学院

第三部 戦後篇 各論（一）

- 第1章 西南学院中学校
- 第2章 西南学院高等学校
- 第3章 その他の教育保育機関

第三部 戦後篇 各論（二）

- 第1章 大学の開設
- 第2章 大学の発展
- 第3章 大学の拡充強化
- 第4章 大学の質的強化
- 第5章 大学付属研究教育機関
- 第6章 入学試験・学生生活・就職
- 第7章 学生の自治活動

学院関連諸団体

付録（I～VI）

年表

索引

編集後記

なお、学院史編纂に関する経過については、【下巻】戦後篇 総論第3章第五節及び編集後記において、それぞれ異なる立場から述べられている。

2. 『70年史』の特徴

(1) 最初の本格的記念誌

目次・及び全体を概観してわかる最大の特徴は、「70年史」という、50年史と100年史の「途中の」記念誌でありながら、サイズはA5版で、上巻(684ページ)・下巻(1,465ページ、索引76ページ、編集後記)の2巻で構成され、誰が見ても重厚なものに出来上がっていることである。このような大がかりなものは、通常50年とか100年などの大きな節目で企画される性質のものではないか、というのが誰もが受ける第一印象ではないだろうか。

この点に関しては、村上寅次学院史企画委員長の「編集後記」の以下の記述が参考になる。『西南学院35周年記念誌』(1951)発行の後、「40周年、50周年と学院の発展の大きな節目を迎える度毎に、学院史の本格的な刊行が問題となり、その実現への努力がなされたにもかかわらず、実際には、それぞれわずか数十ページの写真を含んだ記念の小冊子が発行されるにとどまった。」とある。

ここには西南学院「40年史」「50年史」の編纂が学院において、その都度計画されたにもかかわらず、結局のところ刊行できなかったという事情が深く関係している。そのため1986年に出来上がった『70年史』は、西南学院にとって最初の本格的な正史となった。そして、その際に本来「40年史」や「50年史」などに含まれる内容であったものが網羅的に入れられる結果となり、結局において大部なものにならざるを得なかったということである。それにしても他校の記念誌などと比べた時に、70年という時点でこんなに大きなものを編纂する必要があったのだろうかと思わざるを得ない。

但し、これまでの学院史編纂の失敗にもかかわらず、これだけのものを作り上げた業績は大いに評価されなければならない。またこの時に集められ整理された資料が今も大量に保管されている。これらの上に、次の「百年史」編纂が進められるのである。

また、学院史編纂の中心的な役割を果たしたのが田口欽二室長である。彼に関しては、「しばしば協議し、時には激しく意見をたたかわすこともあった」が、「(13年にも及ぶ)ねばり強い努力がなければ、今回の学院史の出版は、実現しなかった」という委員長村上の評価が残されている。

1 「学院関連諸団体」には、ヨルダン社や同窓会なども収録されている。

(2) 「前史」の存在

次に、『70年史』であるにもかかわらず、【上巻】序論において「西南学院」とも「70年史」とも直接何の関わりもない（と思われる？）いわば「前史」から記述が開始されており、更にそれが相当の分量に及んでいる点について言及してみたい。以下、簡単に見ていく。

序論の第1章・第2章では、キリスト教（ネストリウス派）が中国に伝えられた7世紀を第一段階とし、元の時代にローマカトリックがおこなった伝道を第二段階とし、15世紀に入ってから大航海時代にフランシスコ＝ザビエルに始まる伝道を第三段階として位置づけている。

次に、第一部「前史篇」の第1章では、バプテストの歴史と簡略な説明がなされ、第2章では、第四段階としてのW. ケアリーによるインド伝道やA. ジャドソンによるビルマ伝道が述べられ、第3章から第4章では、幕末期から明治維新におけるプロテスタント諸教派による中国・日本伝道が語られている。第5章では、J. ゴーブルらバプテストに始まる日本伝道、ローラー夫妻の遭難、そして南部バプテストによる北部九州での伝道などが語られている。第6章では、C. K. ドージャー夫妻の来福と短命に終わった福岡バプテスト神学校のことが、第7章では、いずれも失敗に終わった連合基督教大学構想と南北両バプテストによる日本バプテスト神学校問題が述べられている。

これら学院創立にいたる「前史」は上巻全体の分量の約1/3（220頁）に当たり、それが上記で述べた大部のものになった主たる原因ともなっている。また、このような視点は他のキリスト教学校の記念誌にも見られないわけではない²が、これだけ紙幅を割いたものは他に例を見ることができない。それは編集当初から問題になっており、編集の中心となった田口室長の強い主張でもあった。

(3) 学院史編集室の独立と企画委員会での対立

その経緯を学院史企画委員会委員長村上寅次の「編集後記」と、【下巻】戦後篇総論第3章第五節の「学院史の完成」から見ることにする。

「編集後記」によると、学院はこれまでの数度に及ぶ学院史編纂が不成功に終わった経過にかんがみて、1971年に神学部を定年退職した三善敏夫に基本原稿の執筆を依頼した。三善は心臓病発作での入院による中断などがありながらも、1年半後に原稿を完成させた。ただ、この原稿は「基本原稿」であって、編集や補筆修正などの必要

があった。そこで、1973年、W.M.ギャロット院長は「学院史編集の仕事を広報室から分離して、学院史編集室として独立させ、これまで広報室長であった田口欽二氏に室長としてこの任務に専念してもらうことにした」のである。

ところが「学院史の完成」によると、直後に開かれた学院史編集委員会で、顧問・監修者・編集委員（委員長一村上）・編集主任などの分担が決定したにもかかわらず、「田口編集室長は、自分は適任ではないとの理由で、編集主任を辞退したため、すべては振り出しにもどってしまった。」のである。ここにはそこでなされた議論や辞任に至った理由は記されていない。その後、1974年に西南学院史監修者懇談会は西南学院史刊行委員会に改組されるが、それも1976年2月の委員会を最後に開かれなくなった。これは田口室長の辞任のため生じた空白によるものと思われる。

次に新たな動きが生じたのは1980年になってからであった。その間、1980年には『西南学院史資料』第一集及び二集、『西南学院年表』（一）（二）が出版され、最小限度の基本資料が完成した。しかも多年にわたって学院史編集委員会委員長を勤めてきた村上が学長と院長を兼任することになり、この機会を捉えて田口室長は村上院長に学院史出版計画の推進を具申した。こうして、1980年11月、常任理事会は学院史企画委員会を設置した。この委員会によって『70年史』が完成されるのである。こうして、村上－田口主導の下に学院史の編纂が進められていくことになった。

ところが事態は順調には進まなかった。再び村上の「編集後記」によると、田口室長はその課程において自己の研究から、従来の学院史の内容にはなかった幾つかの事実を発掘し、それを学院史に盛り込んで、これを完成したいと考えるに至ったのである。それらの内容が、「序論」及び第一部「前史篇」第1章～7章にまとめられている部分であると想像される。

これに対し、「委員長・村上は、その内容の学術的検討は別として、一つの学院史の内容としては、常識的な範囲を超えているとの判断から、田口室長に再考を求めた。しかし田口室長は、その記述の意図のうちに、現在日本の当面している欧米諸国との経済摩擦の問題³の根底にある文化摩擦の問題に、日本人々の注意を向けさせる意味があることを主張し、『序論』及び『前史篇』原稿の大幅な縮小は、その意味を不鮮明にし、ひいては、学院の設立・存立の意義を矮小化することになるとして譲らなかった」のであり、こうして対立が続き、「いたずらに月日が経過していった」ので

3 『70年史』発刊の前年であった1985年、わが国はバブル景気の絶頂期にあった。この年の9月にニューヨークでプラザ合意がなされ、ドル安が誘導され円高が進行することになった。それでも貿易黒字は減らず、欧米との間には深刻な貿易摩擦問題が起こっていた。

ある。

(4) 解消されなかった対立

そこで、1984年院長に就任したC.L.ホエリー院長出席の下、11月に開かれた学院史企画委員会の全体会で以下の3項目が決定された。

(ア) 進行中の学院史は、『西南学院七十年史』として、1986年5月11日の学院創立記念日当日配布できるように出版する。

(イ) 委員会の監修未完了の原稿については、新たに次の部会を作り、その検討を分担して進める。

「前史篇」部会 C.L.ホエリー、F.C.パーカー、関谷定夫、清水実

「戦前篇」総論部会 唐木田芳文、田中輝雄、後藤泰二

(この部会は、後に「戦前篇」各論中、旧制高等学部 of 原稿も受けもった。)

「戦前篇」各論部会 木村良熙、小石原勝

「戦後篇」総論部会 志渡沢亨、渡邊常右衛門

(実際の審議には、村上委員長と田口室長が全部会に参加した。)

(ウ) 各部会の原稿監修の期限を、1985年5月11日とする。

村上は同年12月、学長の任期終了にともなって退職したが、学院理事会の要請によって、引き続き委員長の職に留まって、学院史編纂の任に当たった。

監修期限の1985年になってもきびしい議論が続いていたのは「前史篇」の部会であった。その問題点は、「第一は、学院史で取り上げるべき範囲の限度の問題であった。第二は、キリスト教史を取り上げる場合の、叙述者の史観の問題と、学術的厳密性の問題について、特に神学部の委員からきびしい批判的意見があった。これに対し、執筆者(註田口)からの反論があった。」と、学院史編纂を上記期限までに完成する責任を負う委員長の苦渋が記されている。そこで村上は、「全体的意見をまとめて学院史を目標の期限内に出版する」ために、原案原稿の「前史篇」の分量を圧縮する方針を示したが、結局は、田口 of 原案原稿を生かすという形で決着を見た。このような経緯を経て『70年史』は1986年に4月に完成したのである。

この結果には、企画委員会での論議や委員長の「方針」が貫かれず、刊行の期限が近づく中で執筆者の意見に押されて決着したとの印象がぬぐいきれない。結局は、学院史方針の足並みが最後まで揃わなかったのではないであろうか。しかしこれらの問題以前、そもそも三善原稿の段階の初めから学院史編纂に関する学院の基本方針が欠如していたことや、委員長の「村上校務多忙であったため、内容の上で討議する機会

も少なく、ほとんど田口室長の下で単独に原稿の執筆が進められた。」ところに根本的な問題があったと思われる。

(5) 大学中心の記述

下巻は「戦後篇」総論と各論（一）（二）で構成されているが、総論は183頁、各論（一）の中学が100頁、高校が125頁、その他（早緑子供の園、舞鶴幼稚園）が36頁であるのに対して、各論（二）の大学は695頁となっており、大学の分量は他の部署を併せた2.6倍にもなっている。ここでは特に、その他（早緑子供の園、舞鶴幼稚園）の内容が少ないのが目につく。これらは、先に刊行された『舞鶴幼稚園60年のあゆみ』（1973年）、『早緑子供の園30年のあゆみ』（1979年）を参考にして書かれているが、全体に比べて分量的に著しく少ない扱いとなっている。併せて、西南学院の3年前に設立された舞鶴幼稚園が後に設立された早緑子供の園と共に、「その他」として学院史に記載されている点に、大学中心の偏りを指摘することができる。

II. 『百年史』への展望

1. 史料編の作成

では「百年史」は、どのように編纂されるべきか。まず基本的な枠組みに関しては、既に多くのキリスト教主義学校から発行されている「百年史」が参考になる。サイズは『70年史』と同じA5版が望ましい。他のものも、ほぼこのサイズで統一されている。経費や頁数などについては、これからの検討課題である。

「西南学院史」は、「百年史」編纂後もずっと研究・追求されるべきテーマで、時代の批判にさらされ、常に再吟味がなされる中で、学院の歩みが調えられていかなければならない。そのためには、学院の基本資料がすべての人に公開されることが前提となる。この資料編は、そのような意味を込めて編集されるべきである。同時にデータベース化されて、誰でもがいろいろなところから利用できるように便が図られるべきであろう。また、そのためには新たな史（資）料が絶えず補われ、これからも機会あるごとに追加されることが望ましい⁴。

「西南学院研究史」のための基本史料としては、現在あるものに加えて、ドージャー家関係の顔写真、宣教師の名前と在任期間、ミッションボード関係、日本パプテスト連盟関係、理事会記録、所属部門の会議録、地元の新聞・雑誌などの記事、戦

4 西南学院でも1980年に、『西南学院史資料』第一集、及び、『西南学院年表』（一）として出版されている。

争中の学徒出陣による戦死者名、個人が所蔵している資料などの充実が期待される。

また、これらの作業によって「史料編」と「通史編」とに分けられることで、何でも網羅的に入れられていたものが、全体的にすっきりとした体裁になることが期待される。見た目には、この点が『70年史』と「百年史」の一番大きな違いとなるであろう。それ故、これら資料編の編纂作業が一段落した後に、通史編の編纂に入るという順番になるのではないだろうか⁵。

2. 「百年史」の視点

(1) 第三者に読んでもらえる記念誌に

『70年史』は学院の創立と発展を記録するという視点で記述されていると思われる。確かに戦中、戦後の大学紛争、財政問題など一時期において、いろいろ困難はあったであろうが、それでも西南は順調に発展してきたというのが、全体を貫くトーンではないだろうか。

扉のカラー写真に続く坂本重武理事長による発刊の辞には、『…西南学院は、1916（大正5）年、中学西南学院として、教職員9名・生徒105名をもって発足した。それから70年、現在は、学校法人西南学院として、大学・高等学校・中学校・幼稚園及び保育園を持ち、教職員及び学生・生徒等の総数は一万人に近く、一大学園に成長している。卒業生の総数は七万名に及ぼんとし、各地・各界において活躍している。まさしく、まかれた（略）種は木となり繁茂した。春風そよぐ日もあれば、大嵐に採まれる日もあった。しかし、ともかく、70年の風雪に耐えてきた。そして、今は鬱然たる森となりつつある。（略）』とある。

第二部 戦前篇 総論の第1章 西南学院の創設のあとには、第2章 苦闘と前進 第3章 戦時体制下の学院と続き、第三部 戦後篇の各論（二）は西南学院大学となって、大学の開設・発展・拡充強化・質的強化などの項目が並んでいる。これらは戦時中の学院の苦闘とそれに続く戦後の発展を印象づける構成となっている。

しかし、『70年史』から30年が経過して編集される「百年史」においては、100年という時間的経過のなかで、もう少し客観的な評価が可能になるのではないだろうか。特に、建学の精神との関連で、現在の西南学院の姿を振り返って見る必要があるのではないだろうか。併せてキリスト教学校としての西南学院の歩みを近現代史の中に位置づけて描くことに務めることなども必要であろう。

兎に角、このような性格の記念誌に往々にして見られる自画自賛の内容になること

5 『立教学院百二十五年史』資料編 第1～5巻、『関西学院百年史』資料編ⅠⅡ、『同志社百年史』資料編一・二など

だけは避けなければならない⁶。

(2) 編集の基本方針の確立

そのためには『70年史』のように何でも有りの網羅的なものではなく、編集会議の下に、いくつかの基本方針が決められ、そこで内容の質と量が吟味・精選される必要がある。また、各部署のバランスも考慮されなければならない。『70年史』は各部署の記述に統一性が弱く、全体を統括する編集会議が機能したとの印象は弱い。また、委員長と実務担当者との対立が解消されないまま編集が進められた。

最後に、読んで面白い内容にする必要があるのではないだろうか。せっかく「百年史」を編纂しても、本箱の片隅に置かれているだけでは意味がない。ひとりでも多くの人がこれを手にして、学院の歴史を理解し、これからの西南学院の歴史に参加していく手助けになることが重要である。繰り返すが、何よりもまず編纂の基本方針が明確にされなければならない。

3. 『70年史』との関係をどうするか。

「百年史」編纂に当たって、以下のような主張がなされる可能性があることを押さえておきたい。それは、『70年史』の続きとして、それ以降の30年間の歴史を中心に書くという考えである。この立場に立つと、「百年史」は『70年史』の続編となり、それ故、同じような通史としての「百年史」として、改めてつくる必要はないということにもなる。たとえ、内容や視点は異なっても、同じようなものが二つあるという印象を外部に与えることになるからである。また、前者も「学院の正史」なので、これを「否定」するのも不自然であると。この立場に立つと、「百年史」の規模は限定されたものとなる。

ところが、『東北学院七十年史』・『東北学院百年史』を見ると、そこにも同じような事情があったことがわかる。中味を比較すると、両者の関係は「百年史」の時点で再度歴史を検討し書き直されているのである。このように、前の歴史観とは異なる視点に立って、『東北学院百年史』は書かれている。歴史は常に現代史であるという観点からすれば、私たちの「百年史」も今の時点で新たに記述するのが良いのではないか。本学院の『70年史』で取り扱った内容であっても、30年を経た今日の視点から見

6 「世の列伝小伝なるものを見ると、その人だけが股をひろげて立ちはだかり、その人でなくちゃ何もない、まるでその人は全能みたいにほめることばのみが一杯で鼻持ちならぬのが多い」（『永遠の西南』第二部追想「西南と院長河野貞幹」河野博範 416頁）

て不十分・不適切と思われる箇所の再解釈・再検討は当然なされる必要があるのではないか。こうして、いろいろな視座が与えられることで、それだけ西南の歴史が豊かになるのではないだろうか。諮問委員会ではこの後者の立場を確認しているが、この点の確認が一番の基本であろう。

それ故、「百年史」では『70年史』に欠けている記事や、そこでは扱わなかったテーマ、またどこを書き換えるのかなど、十分な検討が必要になる。

また、テーマごと、列伝風のもの（人物史）など、読む人の立場に立った体裁を心がける必要がある。節目での出来事や人物のエピソードなどをコラム風に載せ、写真を多く載せ、ビジュアルな装いとするなどの工夫は時代の趨勢と思われる。

最後に、個人情報保護法との関連で、職員名簿や個人名などはどこまで記載できるか、などの検討も必要となろう。